

# 田上町行屋崎遺跡出土遺物にみられる 外来系要素について

田 中 祐 樹

## はじめに

淳足柵（647 年）・磐船柵（648 年）の造営は、対蝦夷政策という国家的プロジェクトであり、それを担ったのは在来の人々だけでなく、さまざまな地域から派遣された人々が大きな役割を果たした。ところで、この柵造営から間もない、7 世紀後半に突如として出現する田上町行屋崎遺跡は、多様な地域からの人の移動を示唆する遺物の存在から、「移民のムラ」とであると評価する研究者が多い。筆者も同様の問題認識から、主に東北系要素を持つ出土遺物に着目してきた（田中 2018a・2018b）。本稿では、東北系を含め、考古資料にみられる当該地域では確認できない要素を「外来系要素」として取り扱うこととし、この「外来系要素」の検討を通じて、行屋崎遺跡をめぐる人とモノの動きの把握を試みる。



第 1 図 行屋崎遺跡の位置（田畑ほか 2015 を改定）  
（国土地理院「矢代田」1:25,000 原図 2010 年発行）

## 1 行屋崎遺跡の概要と遺跡の評価

行屋崎遺跡は、新津丘陵を望む五社川右岸の自然堤防及び、五社川旧流路に所在する（第 1 図）。平成 24 年に、一般国道 403 号道路改築工事に伴う試掘確認調査で、土坑、ピットといった遺構と 9 世紀代の土師器や木製品が確認されたことから新発見遺

第 1 表 編年対比表

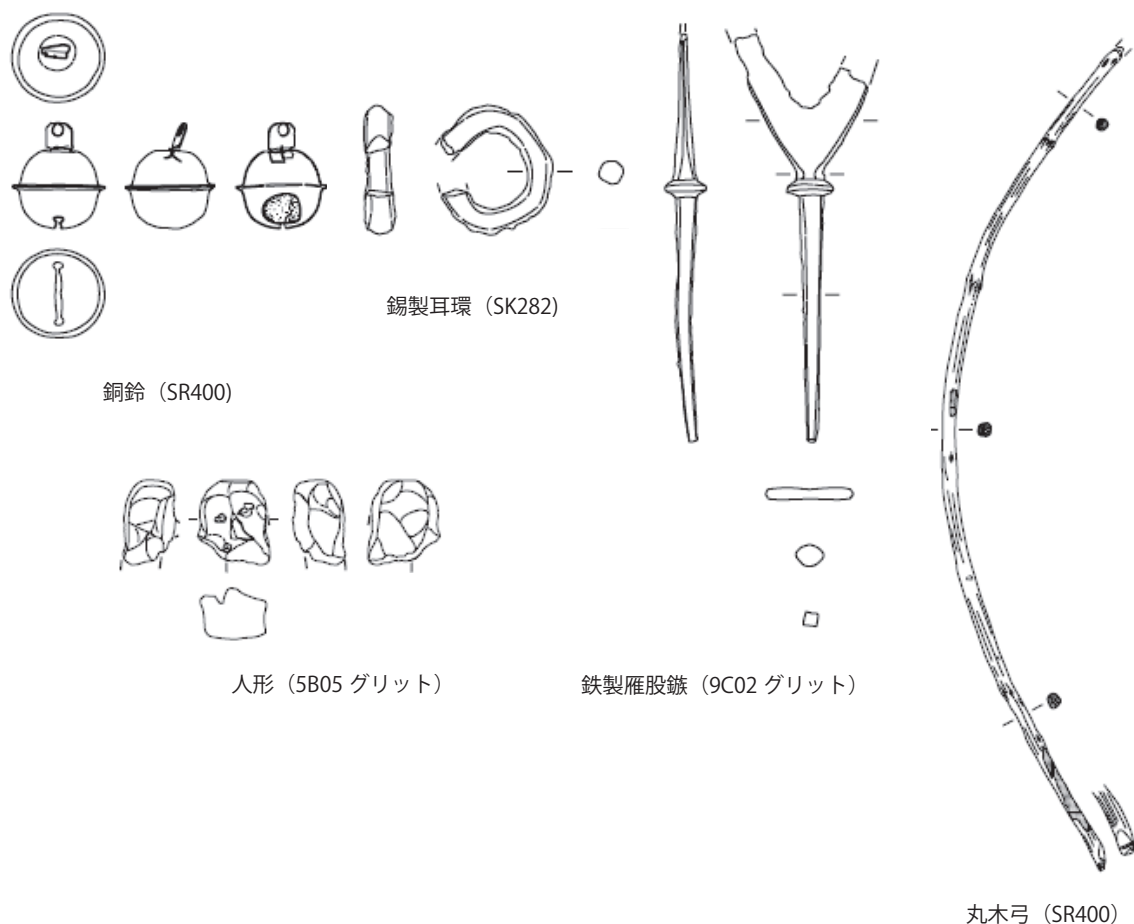
実年代	須恵器型式	春日 2006 編年	西 1986 編年
6 世紀末	TK209	I1 期	
7 世紀第 1 四半期	TK217 古	I2 期	飛鳥 I
7 世紀第 2 四半期	TK217 新	I3 期	飛鳥 II
7 世紀第 3 四半期	TK46	II 1 期	飛鳥 III
7 世紀第 4 四半期	TK48	II 2 期	飛鳥 IV

跡「行屋崎遺跡」が登録されている。この試掘確認調査の結果を受けて、翌年 5 月から、田上町教育委員会による本発掘調査が実施されている（田畑ほか 2015）。調査では、五社川の旧流路である SR400 と、その北側の自然堤防上に展開する掘立柱建物を中心とした集落域を確認しており、帰属時期が概ね飛鳥Ⅲ段階（春日編年 II 1 期）に限定できることが明らかになった（第 1 表）。

飛鳥時代の遺構は、五社川旧流路（SR400）、掘立柱建物 16 棟、溝 11 条、土坑 129 基、ピット 300 基、

杭 28 基である。遺物は、五社川旧流路（SR400）を中心に、土器（須恵器、土師器）、石製品（紡錘車、権状錘、砥石、凹石）、木製品（農耕具、把手付槽、丸木弓、皿等）、金属製品（銅鈴、雁股鏃、錫製耳環、鉄斧、鉄製鏝）、土製品（羽口、人形土製品、馬形土製品、円筒形土製品、板状土製品、移動式カマド）が出土している。

このように行屋崎遺跡では、多様な出土遺物が認められるが、とりわけ特筆すべきなのは一般的な農耕具が少なく、儀礼祭祀色の強い遺物が目立つ点である（第2図）。行屋崎遺跡に近接する、ほぼ同時期の集落遺跡である新潟市大沢谷内遺跡（新潟市教委 2012）が、律令的祭祀色が強いのにに対し、古墳時代的な様相を多分に留める構成といえる。このような点から、一般的な農業生産に依拠した集落ではなく、製鉄・鉄器生産、木器生産といった手工業生産を生業とした集落との評価がある（田畑ほか 2015）。

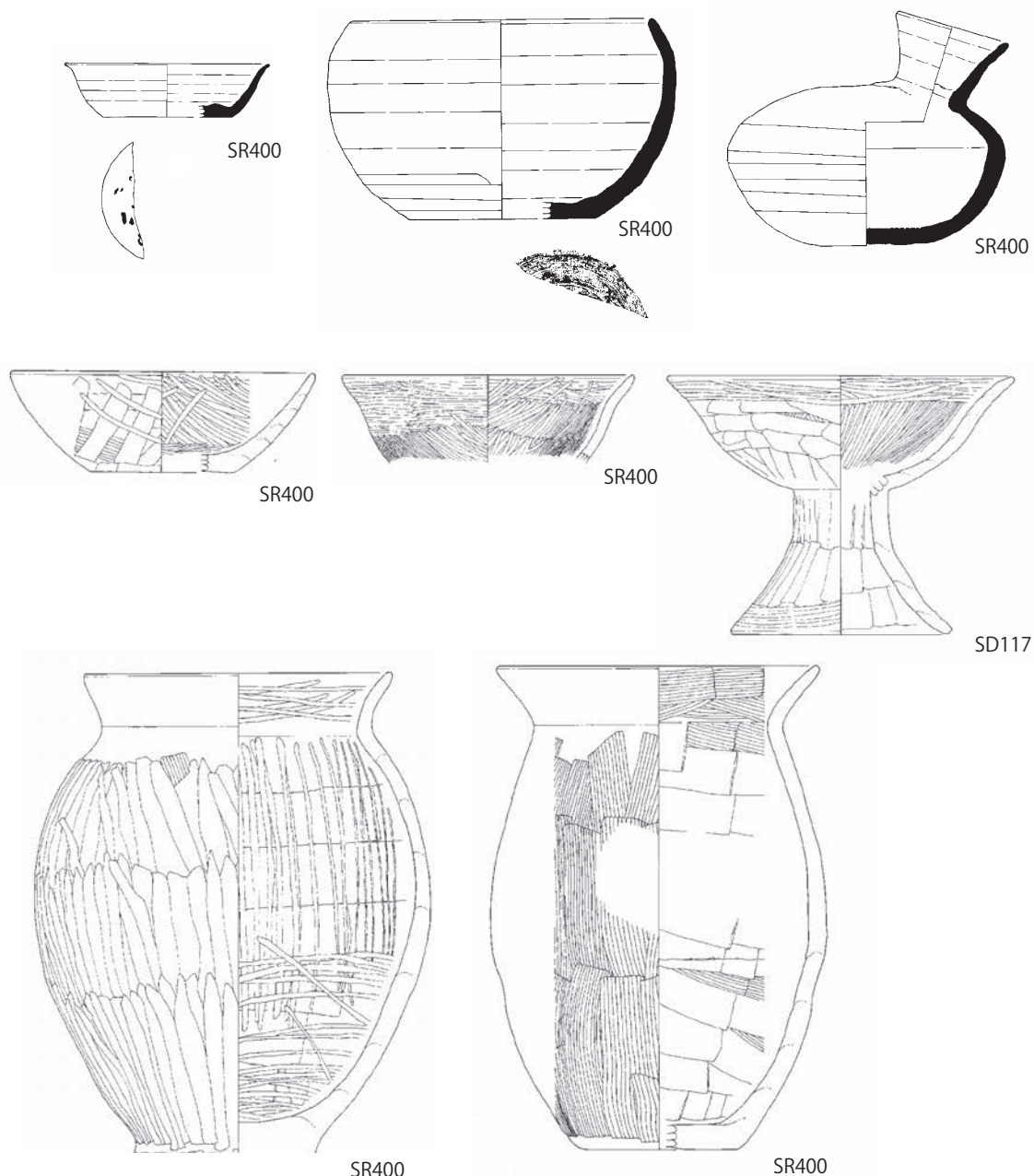


第2図 儀礼祭祀色が強い遺物群 (S = 1 / 4)

## 2 土器類にみられる外来系要素

行屋崎遺跡出土土器を通観したところ、土器類の構成比率では、土師器が圧倒的に多く、食膳具では非ロクロ成形の土師器、煮炊具では、長甕・小甕・甑が主体を占める。一方、須恵器は客体的な存在といえ、食膳具の大半を須恵器で構成される飛鳥Ⅲ期の様相とは一線を画す。ここでは、行屋崎遺跡における飛鳥時代の土器様相を概観しておきたい（第3図）。

須恵器では、杯Ⅱ、無台杯、有台杯、高杯、鉄鉢形、甕、瓶がある。胎土分析を経ていないため、断定



第3図 行屋崎遺跡出土土器(S = 1 / 4)

はできないが、海綿状骨針を含む胎土<sup>1)</sup>の資料が認められており、これらは新津丘陵周辺で生産された可能性がある。

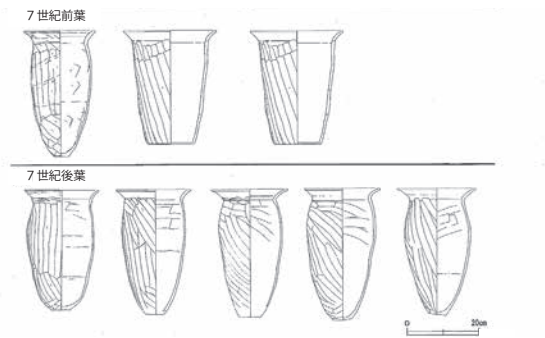
土師器食膳具は、高杯が非常に多く、杯部や脚部の形態がバラエティーに富んでおり、古墳時代的な様相が色濃く残る構成といえる。例えば、杯部の口縁が外反して立ち上がるタイプは、古墳時代後期から継続的にみられるもの(相田 2004)で在地系と考えたい資料である。

土師器煮炊具は、長甕を中心に多様な製作技法が用いられた資料が多く、報告書でも甕類にみられる製作技術の多様性から「移民」の存在を肯定的にとらえている(田畑ほか 2015)。



## 2 - 1 関東系要素がみられる土師器

ここで筆者が着目する関東系要素とは、関東地域で普遍的に出土する所謂「武蔵型甕」にみられる諸要素を指す。武蔵型甕とは、群馬県・埼玉県を中心とした地域で、7世紀前葉に出現する甕類の総称で、胴部への入念な縦方向ヘラ削りと特徴的な口縁部形態がみられることで知られる（第4図）。また、胎土は非常に洗練されているが、利根川水系特有の角閃石を多量に含むことが大きな特徴である。ここで取り上げた要素は、観察によ



本庄市今井川越田遺跡

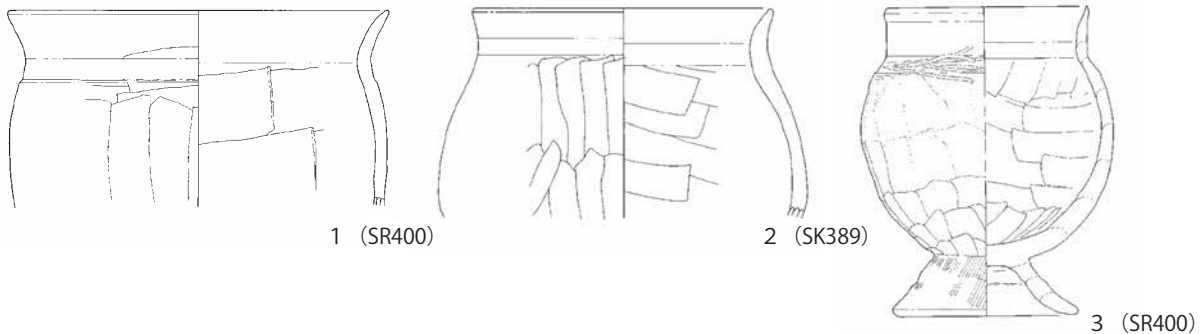
第4図 武蔵型甕の変遷

る認識・識別が比較的容易なものであり、行屋崎遺跡出土土器について先の要素に重点を置いて観察した結果、武蔵型甕の特徴を有する資料が確認できた（第5図）。

第5図 - 1は、長甕である。いわゆる関東で長胴甕と呼称されるタイプの甕で、ハの字状に大きく開いた口縁部と胴部への入念なヘラ削り調整がみられる。ただし、関東特有の削りによる薄甕化がみられない点や、胎土に角閃石を含まないことから搬入品とは考え難い。

第5 - 2、3は、台付甕である。2は下半部が残存していないが、球胴上部へのヘラ削り整形が顕著である。ただし、口縁部形態が関東の台付甕と異なる点、器厚が厚い点からは搬入品とは考え難い。また3は、ほぼ直立した口縁部を有する特徴的な資料であるが、やはり関東の台付甕との型式学的差異は著しく、搬入品ではないと判断できる。

このように、行屋崎遺跡で確認できる関東系要素を持つ土器は、器形や成形・調整方法といった個別の要素は認めえるものの、関東からの搬入品と判断できる資料は確認できない。



第5図 行屋崎遺跡でみられる関東系要素を持つ土器(S = 1 / 4)

## 2 - 2 東北系要素がみられる土器

新潟県内における東北系（北方系）土器については、加藤学による北方系土器の認識と提唱（加藤 2001・2004）以来、相田泰臣（相田 2009）や関雅之（関 2001）、水澤幸一（水澤 2008）らによる精力的な研究がある。また、筆者も県内の東北系土器について、その動向を追っている（田中 2018a・2018b・2019）。ところで、後述するように行屋崎遺跡では、東北系要素がみられる土器が定量確認されている。ここでは、筆者による東北系土器の分類案（田中 2018b）に従い、①東南北部（北方系）要素を持つ土器。②東南北部（栗圀式）要素を持つ土器。③東北系全般にみられる要素を持つ土器。の3つに大別した。以下、各要素がみられる資料についてみていくこととする。



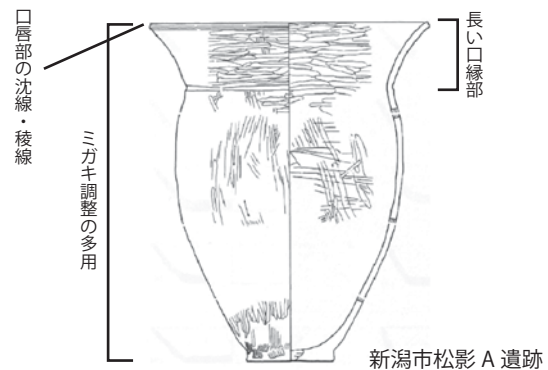
### 2-2-1 東北部(北方系)要素を持つ土器(第6図)

この要素については、先に触れた加藤学による一連の研究(加藤 2001、2004)によって、北方系土器にみられる要素として指摘されたものである。その特徴をまとめると、以下のとおりである。

- ① 口縁部や胴部へのミガキ調整の多用
- ② 口唇部に巡る沈線・稜線
- ③ ハの字状に長く伸びる口縁部

これらの要素を持つ土器は、加藤学、水澤幸一、相田泰臣らの研究によって、新潟市大沢谷内遺跡(新潟市教委 2012)、松影 A 遺跡(加藤 2001)、新発田市馬見坂遺跡(関 2001)、胎内市大坪遺跡(水澤 2008)など、阿賀野川以北(以下、阿賀北地域)を中心に確認されることが指摘されている。

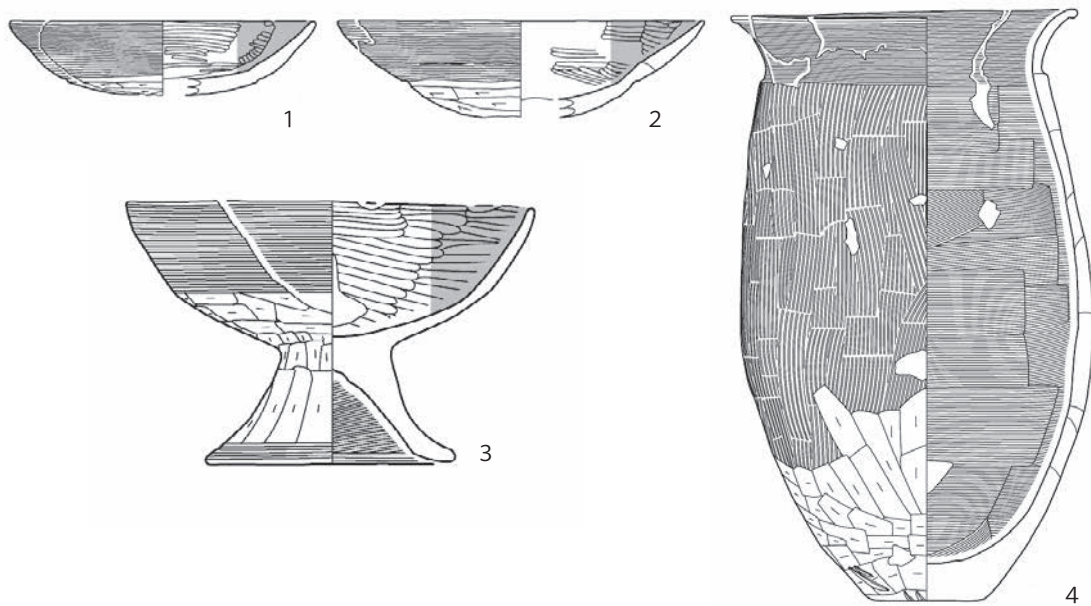
なお、行屋崎遺跡では管見の限り、この要素を持つ土器は確認できない。



第6図 東北部(北方系)要素を持つ土器の特徴

### 2-2-2 東南部(栗罎式)要素を持つ土器(第7図)

仙台平野以南の宮城県、福島県域を中心にみられる所謂「栗罎式土器」にみられる諸要素を持つ土器が、行屋崎遺跡から少数ながら確認できる(第8図)。以下、各要素毎に詳述していく。



仙台市西台畑遺跡

第7図 東南部(栗罎式)要素を持つ土器(S=1/4)

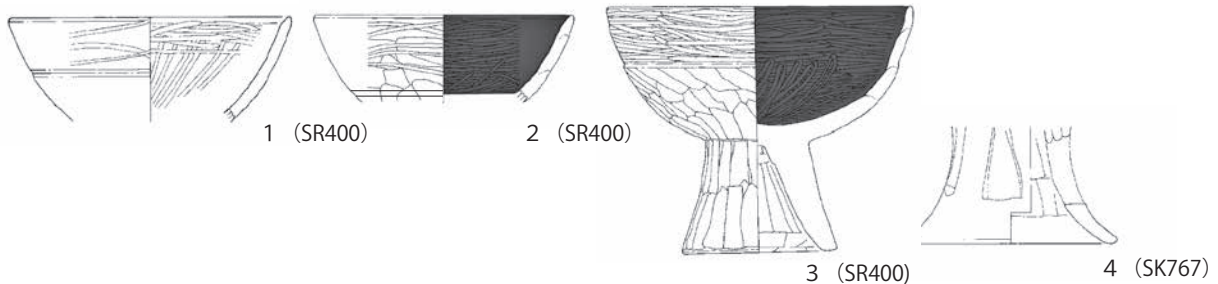
- ① 丸底・口縁部ミガキ調整多用の杯と高杯

第7図-1、2は丸底で底部と口縁部の境に稜線が巡る。調整にはミガキを多用し、内面黒色処理を施す。3は、丸底の杯部を持った高杯である。これらの土器にみられる特徴は、栗罎式土器に顕著にみられるもので、新潟県域では、他に、聖籠町山三賀Ⅱ遺跡(坂井ほか 1989)、上越市一之口遺跡東地区(鈴木ほか

1994) で類例がある。

② 長甕にみられる下膨れた器形

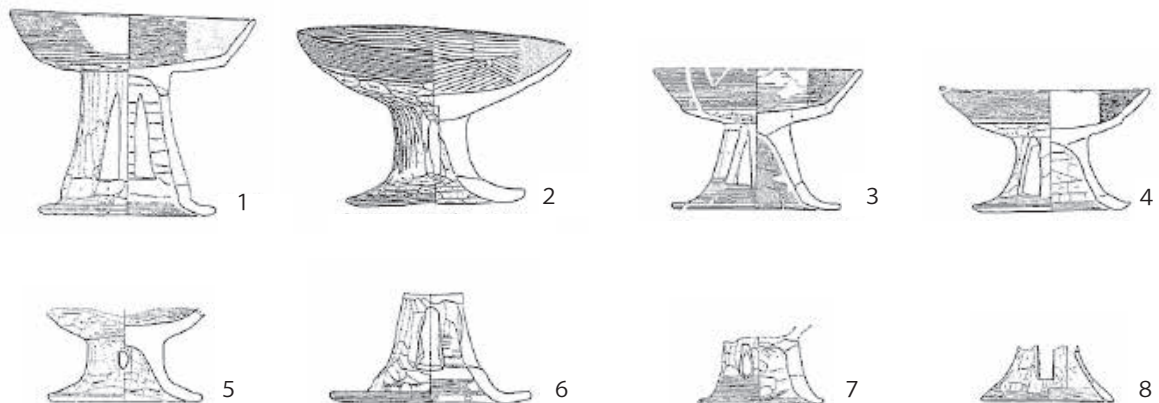
第7図-4は、胴部最大径が胴部下半部に位置する長甕で、一見すると下膨れた器形を呈する。行屋崎遺跡では確認できないものの、新潟県域では、上越市一之口遺跡東地区（鈴木ほか1994）、延命寺遺跡（山崎ほか2008）、十日町市馬場上遺跡（菅沼ほか2003）などで類例がある。



第8図 行屋崎遺跡でみられる東南北部(栗囲式)要素を持つ土器(S = 1 / 4)

③ 透かし入り土師器高杯（第9図）

脚部に脚部に透かしを施した須恵器模倣高杯で、新潟県内では行屋崎遺跡が唯一の出土事例である。調査報告書では東北地方南部に系譜を辿れると指摘されており（田畑ほか2015）、また、東北地方南部の官衙関連遺跡からの出土が目立つとの意見がある（村田2007・2009、佐藤・大久保2017など）。筆者は、東日本を対象に透かし入り土師器高杯の集成作業を進めており、現時点で、①宮城県の遺跡からの出土が目立つこと、②官衙関連遺跡である、宮城県郡山遺跡群（郡山遺跡、西台畑遺跡、長町駅東遺跡）、赤井遺跡での出土量が全体の約半数を占める点が判明している（田中2018a）。



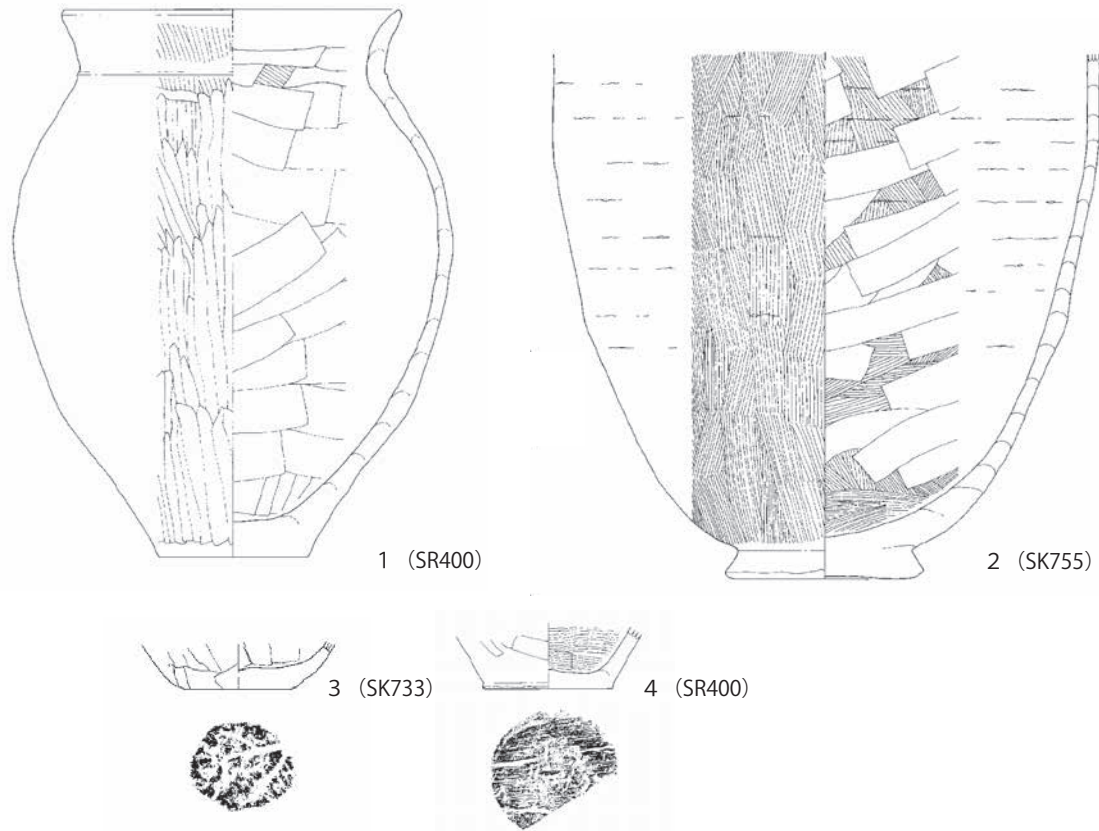
1. 山王遺跡、2 王ノ壇遺跡、3～5、8. 西台畑遺跡、  
6. 元袋Ⅲ遺跡、7. 栗遺跡

第9図 透かし入り土師器高杯の出土事例(S = 1 / 4)

2-2-3 東北系全般にみられる要素を持つ土器（第10図）

ここで取り上げる諸要素は、東北部（北方系）要素を持つ土器、東南北部（栗囲式）要素を持つ土器のいずれでも確認される特徴であり、場合によっては栃木や茨城といった北関東地域でも認められる。こ

これらの特徴は、研究者によっては東北系と見做さない場合<sup>2)</sup>もあり、注意を要する。筆者は、ここで取り上げる要素の全てが東北系要素と捉えられる可能性は極めて低いと考えている。これらの特徴を持つ土器は、東北北部（北方系）、東南北部（栗田式）要素を持つ土器に比べ、広範囲かつ長期間にわたって確認されることを踏まえれば、その背景に多様な系譜の存在を考慮する必要があると考える。よって、他の要素との組み合わせによっては、東北系土器と捉えられる資料の存在は認めるが、下記の特徴のみを取り上げて東北系要素と認定することには慎重にならざるを得ない。



第10図 行屋崎遺跡の東北系全般にみられる要素を持つ土器(S = 1 / 4)

① 甕頸部を巡る段、沈線

第10図 - 1の長甕には頸部に段が巡る。また、行屋崎遺跡では確認されていないが、沈線が巡る資料も散見される。

② 甕底部の張り出し

第10図 - 2は長甕で、底部側面が著しく張り出す。張り出し具合の程度は資料によってバラつきがあるものの、総じて東北系要素として認識される場合が多い。

③ 底面の葉脈状圧痕

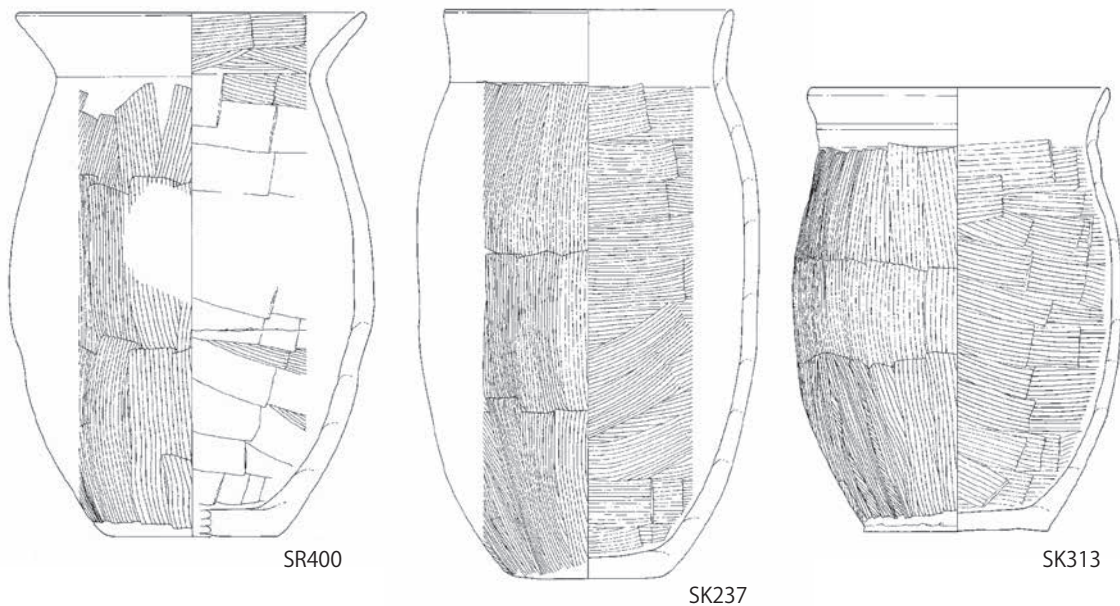
第10図 - 3、4の甕底面には、土器製作時に底部に敷いた葉の葉脈痕が確認できる。新潟県内では他にも多くの遺跡で確認されている。この特徴は東北地域だけでなく、東関東などでもみられることから、注意を要する。

2-3 上越系土器について（第11図）

胴部最大径が胴部中位に位置し、胴部外面には縦方向の刷毛調整を施すタイプの長甕である。県内では、



上越市一之口遺跡東地区（鈴木ほか 1994）、延命寺遺跡（山崎ほか 2008）などの頸城平野の集落遺跡で主体的にみられることから上越系とした。行屋崎遺跡では、甕類の半数近くが上越系の長甕が占めていることが確認された。



第11図 行屋崎遺跡の上越系土器(S = 1 / 4)

### 3 土器以外の出土遺物にみられる外来系要素

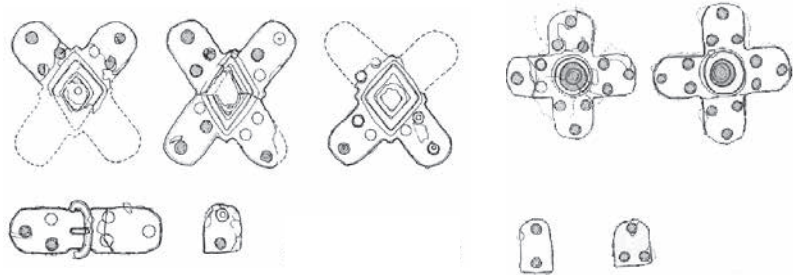
前項では、土器、とりわけ土師器にみられる外来系要素について詳述したが、行屋崎遺跡では、土器以外の出土遺物でも外来的な要素を持つものが多い。そこで本項では、土器以外の出土遺物にみられる外来系要素について、遺物毎に詳述していく。

#### 3-1 錫製耳環

飛鳥時代の包含層中から出土した耳環は、報告書（田畑ほか 2015）では銅製とされているが、化学分析の結果、純度の高い錫製であることが判明している<sup>3)</sup>。古墳時代後期以降、錫製品は東北地方の太平洋側の古墳・墳墓で出土が目立つ傾向がある。具体例を挙げると、福島県南相馬市羽山1号横穴の錫装辻金具（第12図 - 1）、矢吹町弘法山2号横穴の錫装辻金具（第12図 - 2）、双葉町沼の沢5号墳の環状錫製品（第12図 - 3）、さらに、末期古墳では、盛岡市上田蝦夷森古墳の環状錫製品（第12 - 4）などがある。福島県内の古墳時代錫製品を取り上げた横須賀倫達は、東北北部から北海道に特徴的な環状錫製品、千葉県をはじめとする関東地域で多数確認される錫製耳環が、福島県域では両方確認できる点を指摘している（横須賀 2008）。また、横須賀は、錫製品が律令国家側と蝦夷側との交易品として流通した可能性を示唆する（横須賀 2015）。いずれにせよ、県内では出土例がなく、太平洋側（東北・関東）からの搬入品の可能性が高いといえよう。

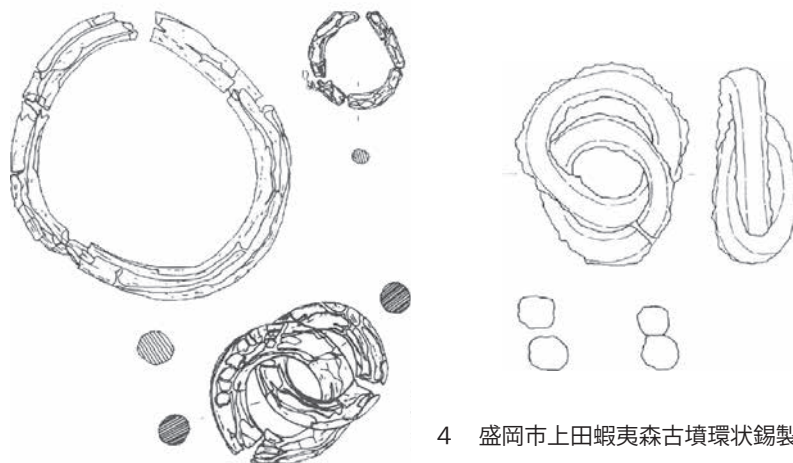
#### 3-2 円筒形土製品・板状土製品

行屋崎遺跡では、土製カマド部材として知られる円筒形土製品・板状土製品が確認されている。円筒形土製品・板状土製品については、春日真実によって、近畿⇒信濃⇒越後と日本海側を北上する形での伝播が想定されている（第13図）（春日 2003 など）。とりわけ、越後では、一之口遺跡東地区、山畑遺跡、荒町南新田遺跡といった頸城平野の集落遺跡での出土事例が多いのが特徴である。春日は、頸城平野の円筒



1 南相馬市羽山1号墳錫装辻金具

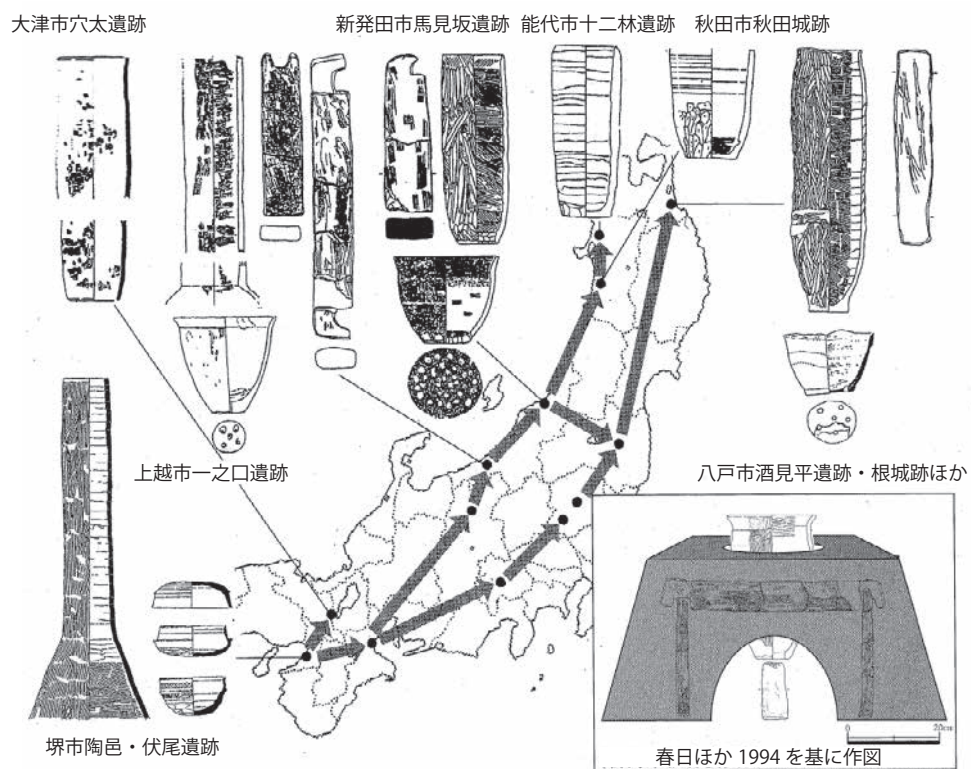
2 矢吹町弘法山2号横穴錫装辻金具



3 双葉町沼の沢5号墳環状錫製品

4 盛岡市上田蝦夷森古墳環状錫製品

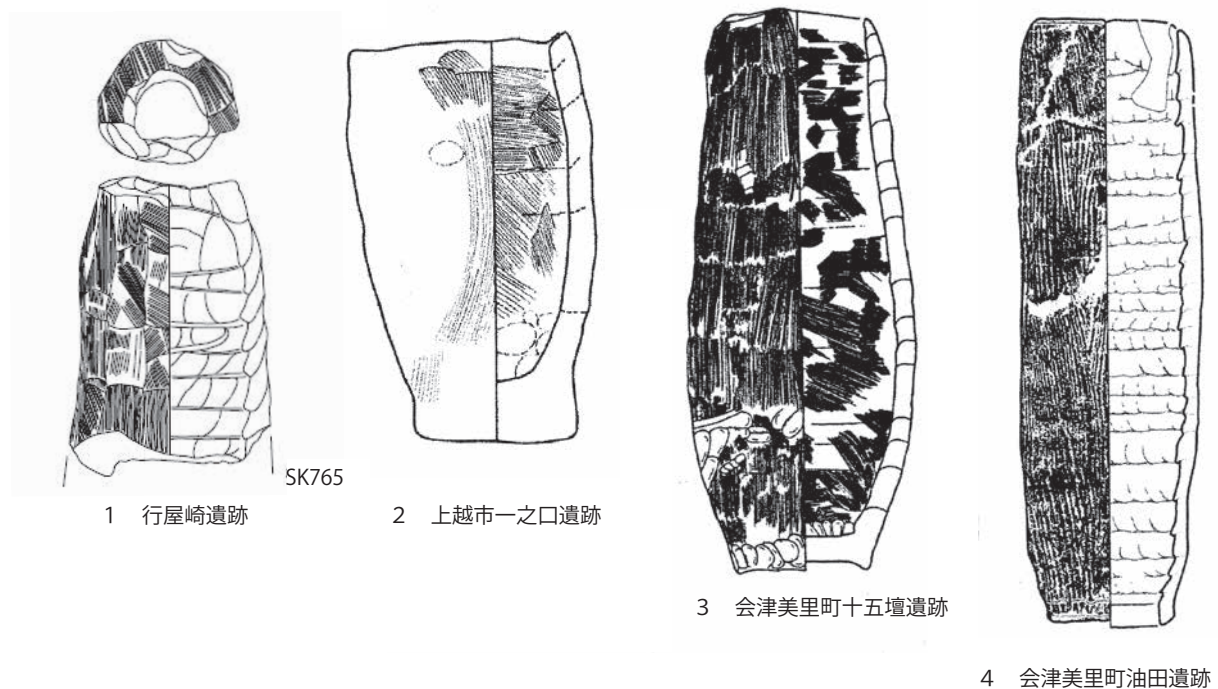
第12図 東北太平洋側の錫製品(S = 1 / 4)



第13図 円筒形・板状土製品の伝播

形土製品・板状土製品を用いる集団の一部が、城柵造営に伴い移動・移住した可能性を指摘している（春日 2006）。

ところで、筆者は土器の項で、行屋崎遺跡から上越系の長甕が定量確認されている点を指摘した。土器はあくまで動産であり、商品としての流通を考えた場合には、必ずしも人の移動・移住の直接的な根拠とは成りえない。一方、小野本敦が指摘するように、カマドという不動産を構成する土製品の存在は、より直接的な人と人とのつながり、つまりは移動・移住を想定し得るものであろう（小野本 2014）。その一方で、行屋崎遺跡で確認された円筒形土製品を仔細に観察してみると、頸城平野で確認されているものとは若干異なった特徴が認められる（第 14 図）。



第14図 行屋崎遺跡周辺域の円筒形土製品(S = 1 / 4)

第 14 図 - 1 は行屋崎遺跡から出土した円筒形土製品である。下半部は欠損しており、全容は把握できないが、窄まった上端部から徐々に裾広がりな器形が確認できる。一方、頸城平野の一之口遺跡の資料をみると、上端部は窄まらず、むしろ下端部が窄まる特徴が確認できる（第 14 図 - 2）。そこで、行屋崎遺跡で確認された円筒形土製品の類例を検索すると、福島県会津地域に類例を求めることが可能である。第 14 図 - 3 は、会津美里町十五壇遺跡の円筒形土製品であるが、特徴的な器形が類似している。また、同様の特徴を有する資料としては他に、第 14 図 - 4 の会津美里町油田遺跡の事例も挙げておきたい。なお、油田遺跡からは、前項で取り上げた「透かし入り土師器高杯」が確認されている点も、会津地域とのつながりを示唆する上で、強調できる材料といえる。

円筒形土製品は、個々の形態差が大きく、資料数も限られていることからこの形態差から系譜関係を特定することには慎重な姿勢が必要である。今後、類例増加を待って検討を進める必要がある。



#### 4 出土遺物からみえてくる人とモノの動きとその背景

ここまで行屋崎遺跡出土遺物にみられる外来系要素に着目することで、その多様な地域性を再認識するに至った。筆者は、その背景に調査報告書でも指摘される「移民」の存在を想定し得る部分が多分にあると認識している。そこで、本項では、ここまでの検討で得られた知見を踏まえうえて、行屋崎遺跡をめぐる人とモノの動きとその背景について私見を述べてみたい（第15図）。

まず、全体の検討をつうじて指摘し得るのは、土器をはじめ総じて東北系要素が目立つ点である。特に東北南部、つまり栗罎式土器もしくはその影響を受けた土器が定量認められる点は改めて強調したい。殊に、仙台平野を中心とした城柵官衙関連遺跡での出土が目立つ「透かし入り土師器高杯」が、行屋崎遺跡で確認されたことは、東北南部（仙台平野）からの人の動きを読み取ることの妥当性と、その動きが極めて政策的なものであった可能性を示唆する。では、その動きの背景とは何か。筆者は、日本海側の城柵設置と、それに伴う地域再編にかかる人的・物的要請を大きな要因とみている。



第15図 行屋崎遺跡をめぐる人とモノの動き

日本海側の柵造営地域（新潟平野北部）は、古墳時代後期以降、墳墓、集落造営が総じて低調であることには多言を要しないであろう。そのような地域における柵造営と地域再編、経営にあたっては、ハード・ソフトの両面で多大な労力を要したことは想像に難くない。端的に言えば、ノウハウに長けた技能者集団<sup>4)</sup>を移民として派遣する必要があったと考えるのが妥当である。その提供元として、第一に考えたいのが先に指摘した東北南部、とりわけ仙台平野である。

言うまでもなく、仙台平野は、郡山遺跡第Ⅰ期官衙や牡鹿柵そして多賀城が造営される太平洋側の柵造営地域である。仙台平野では、城柵設置に先立つ栗罎式土器成立段階（6世紀後半）から関東系土師器が流入することが明らかになっており、これをもって政策的移民の萌芽とみる意見がある（菅原祥夫 2015 ほか）。太平洋側は、日本海側に比べ、古墳時代以来の伝統的勢力が卓越した地域であるが、そうした地域に、色麻古墳群、台町古墳群や大規模横穴墓群などに代表される新興勢力、つまりは関東方面からの政策的移民を含む集団が介入することが知られている。すなわち、郡山遺跡第Ⅰ期官衙造営ならびに地域再編を主体的に担ったのが関東地域からの移民であった。そして、このような郡山遺跡第Ⅰ期官衙やそれに伴う地域再編、経営の過程で、培われたノウハウは、日本海側の城柵設置にあたって、必要不可欠な重要なファクターの一つであった可能性がある。翻って、行屋崎遺跡で確認される関東系要素を持つ土器や、関東系譜の可能性が高い錫製耳環が、日本海側の城柵設置地域で出土する意味もここに求めたい。

一方、甕類、特に長甕でみられる上越系の卓越は看過できない事実であり、円筒形土製品・板状土製品の存在を含め、頸城地域からの人・モノの動きを読み取ることは可能である。これについては、春日による頸城地域から阿賀北地域への城柵設置にともなう移動・移住の可能性が、魅力的な仮説として提示できよう。そしてこの仮説は、図らずも東北・関東系遺物をめぐる、筆者が指摘する人とモノの動きの背景とも符合するものである。

## まとめにかえて - 今後の課題 -

「移民のムラ」という調査報告書での指摘は、主に甕類にみられる多様な製作技術の存在に端を発したものであった。この指摘の是非を、本稿で得られた成果から判断することは早計である。ただし、土器以外の要素について鑑みた際、やはり多様な地域性が垣間みられる点は改めて強調したいのである。本来ならば、今回の検討を踏まえて、遺跡造営が低調な7世紀後半の蒲原平野に突如現れた行屋崎遺跡について、その具体的な性格に言及することが望ましい。ただし、この問題については、近接する新潟市大沢谷内遺跡をはじめとする蒲原平野の集落遺跡の動態とも密接に関わるため、稿を改めて考えることとしたい。

## 謝辞

本稿は、平成30年3月31日に開催された、新潟考古学談話会例会において「田上町行屋崎遺跡出土遺物にみられる東北系要素」と題した口頭発表の一部を、当日参加された方々からの有益な質問、意見を踏まえ文章化したものである。未だ拙い内容ではあるが、賢君諸氏からのご意見、ご叱正を仰げれば幸いである。

末尾になりましたが、下記の機関・個人から資料調査や文献調査にあたって、多大なるご便宜、ご協力を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。

田上町教育委員会、安達俊一、小野本敦、小此木真理、春日真実、金田拓也、加藤学、佐藤敏幸、高木公輔、田畑弘、細井佳浩、水澤幸一（敬称略）

## 註

- 1) 甕類と中心とした土師器の胎土でも確認されるが、海綿状骨針は新津丘陵周辺域以外でも確認できることから、一概に在地生産品と断定することはできない。
- 2) 例えば、水澤幸一は底部の張り出しについて、程度の問題もあることから東北系要素として取り扱っていない。また、相田泰臣は、底部の木葉痕について、古墳前期の統縄文土器に木葉痕が確認できないことから、少なくとも古墳前期の段階において、この要素を北方的とすることには懐疑的である。
- 3) 田上町教育委員会田畑弘氏からご教示いただいた。
- 4) 例えば鉄器製作や農耕具製作を担う集団を想定したい。論文化されたものではないが、細井佳浩氏より行屋崎遺跡で出土している木製鋤が、仙台平野に類例を求め得る可能性にかんしてご教示いただいた。いずれ稿を改めて検討したい。

## 引用・参考文献

- 相田泰臣 2004「越後における古墳時代後期を中心とした土器の一様相」『新潟考古』第15号 新潟県考古学会
- 阿部健太郎ほか 2007『油田遺跡』会津美里町教育委員会
- 小野本敦 2014「新潟県における古墳時代の終焉」『平成25年度 越後国域確定1300年記念事業 記録集』新潟県教育委員会
- 春日真実 2003「越後出土の円筒型土製品・板状土製品について」『蜃気楼』秋山進午先生古希記念論集刊行会
- 春日真実 2006「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 加藤学ほか 2001『松影A遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤学 2004「新潟県域における北方系の土師器甕－事例紹介と問題提起－」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 坂井秀弥 1989「古代集落としての山三賀Ⅱ遺跡」『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
- 佐藤敏幸・大久保奈々 2017「陸奥における古墳時代後期から奈良時代の高坏（1）」『宮城考古学』第19号 宮城県考古学会
- 菅原祥夫 2004「東北古墳時代終末期の在地社会再編」『原始・古代日本の集落』同成社
- 菅原祥夫 2007「第二章 東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
- 菅原祥夫 2015「律令国家形成期の移民と集落」『蝦夷と城柵の時代』東北の古代史3 吉川弘文館
- 菅沼亘ほか 2003『馬場上遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会（文化財課）
- 鈴木俊成・春日真実・高橋一功 1994『一之口遺跡（東地区）』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 関 雅之 2001「新潟県新発田市馬見坂遺跡出土の土師器－阿賀北地域の7世紀の土器様相とその意義－」『北越考古学』12号 北越考古学会
- 仙台市教育委員会 1982『栗遺跡』
- 仙台市教育委員会 1987『元袋遺跡Ⅲ』
- 仙台市教育委員会 2013『西台畑遺跡 第9次調査』
- 仙台市教育委員会 2016a『西台畑遺跡 第4・5・7次調査』
- 仙台市教育委員会 2016b『王ノ壇遺跡』
- 多賀城市教育委員会 1991『山王遺跡』
- 田中祐樹 2018a「田上町行屋崎遺跡出土遺物にみられる東北系要素」新潟考古学談話会発表資料
- 田中祐樹 2018b「透かし入り土師器高杯の新例－田上町行屋崎遺跡出土資料の紹介－」『新潟考古学談話会会報』第36号 新潟考古学談話会
- 田中祐樹 2019「柵造営前後の外來系土器について－関東系・東北系を中心に－」『新潟考古』第30号 新潟県考古学会
- 田畑弘ほか 2015『行屋崎遺跡』田上町教育委員会
- 富田和夫 2009「移民の携えた土器－北武蔵・上野由来の「関東系土器」をめぐって－」『古代社会と地域間交流－土師器からみた関東と東北の様相－』国士舘大学考古学会
- 中村二郎ほか 1997『会津高田町史』第二巻 考古・古代・中世資料編Ⅰ 会津高田町
- 新潟市教育委員会 2012『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査』
- 水澤幸一 2008「岩船柵修理前後の北方系土器－胎内市内遺跡を中心として－」『多知波奈の考古学－上野恵司先生追悼論集』橘考古学会
- 村田晃一 2007「東北北海道における7世紀～8世紀の土器変遷と相互関係Ⅵ宮城県中部～南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 村田晃一 2009「律令国家形成期の陸奥北辺経営と坂東－在地土師器・関東系土師器。囲郭集落の検討から－」『古代社会と地域間交流』六一書房



山崎忠良ほか 2008『延命寺遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
横須賀倫達・小林啓 2008「羽山 1 号横穴出土馬具の調査－錫装馬具の確認－」『福島県立博物館紀要』第 22 号 福島  
県立博物館  
横須賀倫達 2015「特異な副葬品から大化前代の阿武隈川流域を考える」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向  
把握のための基礎的研究』福島大学行政政策学類

## 図版出典

第 1 図 田畑ほか 2015 を改変  
第 1 表 筆者作成  
第 2 図 田畑ほか 2015 を改変  
第 3 図 田畑ほか 2015 を改変  
第 4 図 富田 2009 を改変  
第 5 図 田畑ほか 2015 を改変  
第 6 図 田中 2018 b を改変  
第 7 図 仙台市教育委員会 2013 を改変  
第 8 図 田畑ほか 2015 を改変  
第 9 図 田中 2018 b を改変  
第 10 図 田畑ほか 2015 を改変  
第 11 図 田畑ほか 2015 を改変  
第 12 図 横須賀 2015 を改変  
第 13 図 小野本 2014 を改変  
第 14 図 鈴木ほか 1994、中村ほか 1997、阿部ほか 2007 を改変  
第 15 図 田中 2018 b を改変